



5 万分の 1 地質図幅の新刊

与那国島 YONAGUNISHIMA

5 万分の 1 地質図幅
地域地質研究報告

岸に達する海岸崖に沿って標的に分布し、岩相によって下位から西崎層・久部良岳層・比川層及び新川鼻層に区分され、全体の層厚は 900m 内外である。このうち生層序の要素を持つ有孔虫化石が含まれる地層は、下位の西崎層及び比川層である。

本地域の琉球層群は、いわゆる琉球石灰岩と非炭酸塩碎屑性堆積物とによって構成されていることから、石垣島・宮古諸島及び沖縄諸島にみられるように、主として石灰岩だけによって構成される琉球層群と異なっている。むしろ主帯は陸源碎屑岩層であり、この間にレンズ状に石灰岩層を介在するという層序構成をすることから、琉球層群の標式地とされている喜界島に類似する。

筆者は、本地域に発達する琉球層群を下位から岩相によりドナン層・トゥング田層及びサンニヌ台層に区分している。このうち下位のドナン層の一部には、厚さ 4 m 内外の峠石灰岩をレンズ状に介在し、中位のトゥング田層には厚さ 15m 内外の田原川石灰岩を下位のドナン層と同様にレンズ状に介在している。琉球層群の全体の厚さは、島のほぼ中心部に東一西にのびる地溝状のチャネル地域で最も厚く 120m 内外である。このうち生層序の要素を持つものとして、田原川石灰岩に含まれる *Pecten* 類の多いことから、宮古島地域の友利石灰岩より採集されている *Pecten naganumanus* と同一の層準ではないかと考えている。

半沢 (1925) は、南西諸島のハブの生息を島の標高との関連について述べているが、本地域のように標高 200m 以上の山地が形成されているにもかかわらず、ハブの生息がみられないことから、本島の島嶼化の時代は他の島々と異なった環境下にあったものと考えられる。

著者 矢崎 清 貴

発行 工業技術院 地質調査所

取扱先 東京地学協会 (03) 261-0809 262-1401
そのほか全国主要書店

販売価格 2,390円

与那国島は南西諸島の最西南端にあることから、民族学の一つの仮説である農耕民族の「海上の道」と言う標着の思考からみて、原始大和人の上代の遺風が現代に残されている島と言えよう。また、女酋長アンアイ・イソバによる支配であるいは「海南小記」にみられる「与那国の女たち」で述べられているように、女性に対する奇抜な評判の多い島である。

この地域付近は、北進するフィリピン～台湾島弧と南進する琉球島弧との会合部に相当することから「南へカーブしている島弧系」といわれる。その琉球弧の最も南西部の末端に連なる関係から、北に押される台湾と同様の北進への運動が関連するのかが、与那国島は石垣島の中心部よりやや高緯度に位置している。このことが影響するのかが、気象及び海流らに変化があるのかが、サンゴ礁の発達が他島に比較して悪く、かつ年間降雨量が多いことから、水田耕地に恵まれ米の生産量の多い島である。

ところで本地域を構成する地質は、中新世中期の八重山層群と更新世の琉球層群及び完新世にみられる各種の堆積物より成り立っている。八重山層群は島の東海岸より南海岸をへて西

地質ニュース	第 346 号	6 月号
	定価 ¥ 540	千 実 費
昭和58年 6 月 1 日	発行	
編集	工業技術院 地質調査所	
発行人	林 久	雄
発行所	株式会社 実業公報社	
	東京都千代田区九段南 4 の 2 の 12	
	Tel. (03) 265-0951(代表)	
	振替口座 東京1-32466	
総発売元	株式会社	実業公報社 出版事業部